

資料編(2)

七ヶ浜町でボランティアが展開した地域環境の回復・保全活動

本レポートは、津波瓦礫の撤去等の活動にやや遅れて開始され、その後、七ヶ浜町ボランティアセンターの象徴的な活動となって、多くのボランティアが参加することになる、地域環境の回復・保全に関する活動の報告である。この活動では、土木の専門家を筆頭に、経験豊富な里山フィールドワーカー、重機や技術者を提供された自治体や各企業の専門家に導かれつつ、大量のボランティアが、菖蒲田浜の松林、海浜、公園、さらには農園の整備等、町の宝ともいふべき美しい景観を取り戻すために汗を流した。この稀に見る成果を伝えるために、とくに項目をあらためてここに掲載するものである。

第1章	地域環境の回復・保全活動	概論	……2
第2章	地域環境の回復・保全活動	各論	……9

七ヶ浜町でボランティアが展開した地域環境の回復・保全活動

第1章 地域環境の回復・保全活動 概論

1. ニーズの発生と展開

七ヶ浜町災害ボランティアセンター（以降、センター）では、その活動の基本方針として、「お出でいただいたボランティアの心と身体を大切に、存分に活躍して頂く」ことが合意されていた。当初から、それを目的として模索された地域環境整備であったが、ボランティアに期待できる活動内容が、住民の方々に理解されるにつれ、かなり早い時期から、地域環境整備への要望が発生した。

まずそれは、排水機能の回復要望である。

被災され、緊急避難所に避難された方々が沿岸の被災家屋に近づこうとしても、地震・地盤沈下・津波により排水系統は壊滅的被害を受け、公道に水が流れて大きな水溜りが随所に点在していた。

側溝清掃は、2011年3月、人員・器材ともに十分でない段階から、出向いた場所の瓦礫を道路際に移動させることと並行して始まった。

それまで報道で取り上げられる事の少なかった七ヶ浜町の実情と、心ある支援を積極的に求めている七ヶ浜町ボランティアセンターの姿勢は、やがて急速に全国に伝えられた。

本来の取り組みである瓦礫撤去と並行して、地域環境の回復と保全に取り組むことは、訪れたボランティアの方々に好感を持って捉えられ、活動期間中常に車の両輪のように相互に良い影響を与えあいながら機能した。

当初、ボランティアの来訪状況に応じて手がけたいと考えていた地域環境保全の諸事業は、その

後の旺盛なボランティアの熱意に支えられ、事業項目全てに着手し、結果を残すことが出来た。

七ヶ浜町ボランティアセンターの元に展開された地域環境の回復・保全の諸事業は以下の通りである。もちろんこれらは、ボランティアの取り組みであり、成果は「仮」のものにとどまる。

1. 側溝清掃
2. 海浜清掃
3. 防風保安林整備
4. 造園・植栽
5. 町営農園の整備回復

活動はセンター開設の2011年3月から開始され、町営ほのぼの農園については現在も継続中である。

上記の地域環境整備に携わったボランティアの延べ人数は7万6000人（概数）である。

各項目の代表的写真若干を次ページに示す。

（写真1-1参照）

(1)側溝清掃 2011年7月



(2)海浜清掃 2011年7月



(3)防風保安林清掃 2011年11月



(4)海岸と松林 清掃後 2011年11月



(5)松林の小公園 2011年10月



(6)多聞山毘沙門堂参道修復 2011年10月



(7)造園・植栽 2012年4月



(8)町営ほのぼの農園整備 2013年9月



2. 地域環境保全を支えた人達

七ヶ浜町のボランティア活動に参加頂いた方々は、基本的には個人参加であった。瓦礫処理と環境保全とに分かれたわけではなく、センターの求めに応じて双方に参加頂いた方が大半である。

七ヶ浜町は、今回地震と津波で被災した自治体の中で、町の社会福祉協議会が立ち上げた単独のボランティアセンターとして、多くは未組織・個人参加のボランティアとともに、終始一貫して活動を続けてきた典型的な例と思われる。

今回の地震・津波の災害と阪神・淡路大震災時の地震・火災の災害では、被災地が農漁村と都市部といった違いもあって、被災者が必要とするニーズは大きく異なっていた。阪神・淡路大震災以来、組織され、専門分野を持ち、資金的裏づけがあつて、中長期的な対応が可能なNPO法人の設立が容易となっていた。

一方、半ば衝動的・本能的に、何か出来ることはないかと火災現場に駆けつけた未組織・個人・一般のボランティアは、無残にも有難迷惑の存在と位置づけられる場合があつたのではないかな。

しかし、七ヶ浜町ボランティアセンターのスタッフやリーダー達の会話の中は、このよう見方に対して、違和感が投げかけられた。

そこには、「心のふれあいを大切に」と考えた若者や、「駆けつける義・受け止める義」と感じて行動していた年配者のボランティアが少なからず存在した。

地域環境回復・保全の活動は、この延長線上に位置づけられていた。そのため、好感を持って受け入れられ、支援されたものと考えられる。

さて、地域環境回復・保全の取り組みは瓦礫撤去作業と較べるとマニュアル化しがたく、かつ多少危険を伴うケースがあることから、臨機応変の処置と、格段の安全への配慮が求められる。

七ヶ浜町のボランティアセンターの周辺には数人の類似業務経験者がいたことに加え、会社の支援のもとで、何度も、時には毎週来訪する現業系の半継続的ボランティアにも恵まれた。

例えば、防風保安林（松林）の整備に見られたように、日に 500 人のボランティアが何度も活動するために必要な準備作業や、下地造りは、彼らの連携によって進められた。

松林で大量の伐採作業が必要なことがネットで流れると、チェーンソー持参の個人・団体が集まり旧交を温めながら伐採を進めた。

ボランティアセンターは重機を保有せず、また、保険の関係上重機を使った作業は出来ない。それゆえ、時に巨大な瓦礫に行く手を阻まれた。

そのようなときでも、センター支援の地元企業が、自社の社員と重機で片付けてくれた。

「現場に自分の重機を置くので、誰か使ったら油代はこちらに」そんなお医者さんがいた。また、「指示された仕事を何でもします。ただし希望を言っていければ、福岡から 22 時間かけて来ので、歯ごたえのある仕事を」という、九州の鉄道マンもいた。

また、四国にある人口 1 万人の町の役場職員が職種を取り揃え、測量機器持参で 2 度目の来訪を果たし、町営農園の整備に旋風を巻き起こした。

いつも頼りになった里山の方々は、電動草刈り機 OK。チェーンソー OK だ。

何十度もおいで頂いた千葉・長野のボランティアツアーの方々。

また、これら多くの人々を、七ヶ浜の自然を背景とする非日常世界へと誘ったのは、被災地随一の質の高さを有した七ヶ浜町のボランティアセンターのウェブ室に集った、ボランティアたちの情報発信の結果と言えよう。

七ヶ浜町の社会福祉協議会は、災害以前から災害時の対応を、名古屋に本拠地を置く NPO の講習に参加し学んでいた。

この NPO は七ヶ浜町ボランティアセンターに隣接して事務所を構え常駐した。阪神など先行被災地で活動した NPO や団体の情報に詳しく、その情報はセンター運営上きわめて有効であった。

様々な宗教団体や思想を異にする団体が、センターの統括のもとトラブル無く活動を展開した。

七ヶ浜のボランティア活動を象徴する小冊子『災害ボランティア活動・リーダーの心得』が、現場リーダー経験者有志の手で作られた。

センター開設直後、阪神の運営法は参考にはなかったが、津波災害は状況が大きく違い、野外活動のほとんどの部分は独自に自立的に考える必要があった。現場を任せられ、自身が迷い悩み、仲間と話し合いを重ねた成果がまとめられた。

リーダーたちには、地元出身の大学生達がいた。また、就職が決まって待機中の者、就職活動中の者、留年を決意した者、被災者もいた。彼等はセンタースタッフと一般ボランティアの間に重要な働きをしたばかりでなく、彼らの後を担ったリーダー達に、彼らの経験・知識を伝達した。

七ヶ浜ボランティアセンターは社協が運営する地区唯一のセンターであり、被災者を含め多くの地元の者が、スタッフ、リーダー、サポーターとして常駐した。このことが被災地や被災者の状況把握やニーズの把握をスムーズにし、活動を円滑に進める影の大きな要因であったことは間違ない。

3. 道具・器材・飲料水・伝統工法

ボランティア活動は 2011 年夏には軌道に乗り、多くのボランティアの来訪があった。一般ボランティアは報道やネットの情報に従い、交通・宿泊・飲食・装備の全てを自前で整えてセンターに参集した

が、長靴の踏み抜き防止など厳しい現場環境に対応するには補充が必要だった。

初年の夏は特段の暑さで大量の飲料水・日焼け止め・虫害（ハチ）対策が必要になった。

これらの需要は上部組織から配布される数量を大きく超えていたが、直接の寄付やウェブ上のアマゾンのサービスを使った呼びかけに応じた全国の支援者によって、力強く支えられ満たされた。

カップラーメン、インスタント味噌汁、飲料水、医療応急キット等々がセンターの女性スタッフにより準備され供された。これらは車中泊やテント泊で頑張る中長期滞在ボランティアの一助となっていた。

好意、善意、共感の流れに乗ったボランティアは、もはや貧乏でも徒手空拳でもない。しかしまた、機械力を欠き多大の労苦を乗り越える中での戯言「最強の道具は腕っ節と心意気」も、ある面では真実である。ひとの力、数の力は大きい。

さらに、器材や道具が不足する中、日本古来の手作りの伝統工具や伝統工法が、参加者の創意と工夫の下で大いに成果を上げたことも、特筆すべき点である。被災地は低開発国の現場と似通った側面があるのかもしれない。

七ヶ浜のボランティアが利用し展開した、代表的は伝統工具・工法を以下に列举する。

- ・伝統工具・道具例……タコ、土羽板、モッコ、
- ・伝統工法例……木組み、粗朶沈床、三和土（ソイルセメント）、盲排水

本編の記載との重複を避け、以下の写真掲載をもって報告とする。

(写真 1-3-1、1-3-2 参照)

(1)七ヶ浜ボラセンの重車両 ベンツ2tダンプ



(2)環境整備の友 軽トラック



(3)寄贈の小型運搬機 重量物運搬に活躍



(4)チェーンソー 松林の切り込み隊長



(5)電動草刈機



(6)転圧機 復興多忙 なかなか借りれなかった



(7)発生材の松を用い伝統工法によって作った栈道



(8)手製の伝統工具 土羽板とタコ



写真1-3-1道具・器材

「最良の道具は腕っ節と心意気」(1)



「最良の道具は腕っ節と心意気」(2)



「最良の道具は腕っ節と心意気」(3)



「最良の道具は腕っ節と心意気」(4)



「最良の道具は腕っ節と心意気」(5)



「最良の道具は腕っ節と心意気」(6)



「最良の道具は腕っ節と心意気」(7)



「最良の道具は腕っ節と心意気」(8)



4. 環境回復・保全ボランティアの成果・評価

阪神・淡路大震災以来、一般ボランティアの役割がどのようなものか、定説があるかどうかかわからない。しかし、災害が地震と津波に起因するなかで、ボランティアが被災地の環境の回復と保全に取り組む場合の理念や目標など、確立されていないことは明らかである。従って、過去の事例や定説から、この成果を評価することはできない。

そこで、早い時期にセンター内で議論された、地域環境整備に取り込むことによって望まれた願望が、達成されたかを考察したい。

前述の「1. ニーズの発生と展開」の記述を以下に再整理・補充する。

1. お出で頂いたボランティアの心と身体を大切にし、存分に活躍していただく。
2. 瓦礫撤去と並行し、七ヶ浜でのボランティア活動全体の魅力を高め人員を確保する。
3. 行政と連携した活動につながれば幸いである（行政とのタイアップ）。
4. 被災者・住人の方々と共同作業ができるなら最高（住民参加）。

もともとボランティア活動の量的成果については、過度の期待はしていなかった。一般ボランティアの構成が老若男女・頻繁に休憩しながらの1日4時間程度の作業時間等々を考えると、経済効率云々は初めから問題外と考えた。しかし、だからといって現地の作業が冗漫で安全性を欠くことには決してならなかった。

「今日の目標は?」「安全に楽しくやれるところまで」それだけでよかった。

チームリーダーはしばしば休憩を取ることを促す必要があった。活動初期に大きな牽引力となった地元大学生達や、中長期滞在し大きな貢献をしたリーダー達は、言葉は違っても全員が同じ認識を抱いた。「災害は不幸な出来事、しかしそれに携われたことは自分の人生に必ずプラス」と。

再度上記の1~4について考えると、感性的・定性的な考察結果ではあるが、1~3については、かなりうまくいった事例と評価できる。

4については、環境回復・保全のボランティアの多くの方から「住民の方は何処に?」の声が上がった。これは、被災者とコミュニケーションが存在した住宅瓦礫撤去活動とのギャップによる。農業の委託化、義捐金、高齢化等々多くの複合的な要因があるだろうが、ボランティアには、ちょっぴり残念な気持ちを抱かせることとなった。

ただし、このギャップを埋めるべく、町役場担当課と農業団体代表者は、朝礼での挨拶と謝辞を、一日も欠かすことは無かった。

この3年間、他被災地との比較で見ると、七ヶ浜町は終始断然雰囲気明るく、行き会う方々の表情も明るかったことは相違ない。住民参加という直接の形ではなくとも、地域環境の整備に多くのボランティアが駆けつけたことは、その明るさの一部になっていたことは十分考えられる。

被災者の方々が、永住できる住宅を得て生計が安定しときこそが、復興の初めなのかもしれない。しかし、その前の復旧段階で駆けつけた7万6千人の働きは、記録・分析・評価され、伝承されることが望まれる。

5. 課題

表現は適切ではないが、七ヶ浜ボランティア活動にはアジテーターもヒーローもいなかった。

しかし、自律的に考え行動し、それに共感するものが得意分野で力を貸し、賛同者の輪が急速に広まり、行き交う人が笑顔で「お疲れ様」と言葉を交わすと、胸を熱くする何かが伝染していったように感じられた。

直感的にはこの「何か」に大切なものが内蔵されているように思われるが、解析能力に欠ける以上、課題はただ一つ。「起こった事を記録し保存する」ことであるとする。

第2章 地域環境の回復・保全活動 各論

1. 側溝清掃

七ヶ浜町は町内に1級・2級河川のない珍しい町である。ちなみに国道も存在しない。半島の町であるからだ。

南東方向から来襲し、浸入・後退を数度繰り返した大津波により、表となった海岸線では防波堤の一部と流末水路が流出した。

(写真 2-1 (1) 参照)

また、津波に運ばれた瓦礫や大量の土砂は、浸水域全ての排水系統を麻痺させた。

避難所に避難を終えた被災者の中で自宅の完全流失を免れた方も多く、貴重品等の持ち出しには道路を横断して流れ、敷地に溜まった水は行動の障害であった。

側溝清掃は被災直後の3月から、家屋汚泥・瓦礫の寄り除き要望とほぼ同時に要請された。

まだボランティア数が少なく、道具もスコップ・鋤簾・土嚢袋と一輪車程度しかない状況下で細々と続けられた。

(写真 2-1 (2) 、(3) 、(4) 参照)

以前から七ヶ浜町と交流のあった山形県朝日町から、強力な支援が寄せられた。

町のバスに乗り合わせ最上川沿いの町を出発、寒河江インターから高速道路を利用してセンターにまっしぐら、作業を終えて日帰りで自宅へ、翌日は人員交代して七ヶ浜へ。

コンクリート製蓋付き水路の多い七ヶ浜の側溝にあわせ、多分、町の蓋上げ機を持参。里山人の腕の冴えを存分に発揮し範を示してくれた。

(写真 2-1 (5) 、(6) 参照)

後に同種の機械は、通販を通じてセンターに寄贈され活躍した。

側溝清掃作業は道路と隣接するケースが多く、作業人員が増大した一方で道路も地元や復興の車両により交通量が徐々に増加してきたことから、交通安全対策に留意した。

安全監視交通整理要員の配置・作業箇所前後の道路わきへの旗の設置等である。

本来河川や水路の改修は、下流から上流に向け施工されるのが手順である。

3年経ってようやく海への放水路の工事が着手されている現状では望むべくもないが、悪い作業条件下での作業を強いられ、清掃後短期間で再度土砂がたまり、再施工となった箇所もあった。

瓦礫量低減に資するかもしれない思い付きがある。側溝清掃時かなり大量に発生する「埋め立て適合材」の扱いである。

津波により側溝を埋めたものは、大半が土砂である。ボランティアの手作業の大きな利点は、現地での丁寧な選別作業ができることである。

土嚢に詰める際に埋め立てに適合する一般土砂と、ガラス等不適材を区分することは十分可能である。一方で大きく洗掘された埋め戻しの必要な箇所は存分に存在することから、「埋め立て適合材」土嚢は一時仮置き場に搬入することなく、処理が可能である。

ちなみに土嚢に詰める瓦礫区分は今後もう一工夫必要である。示されるのが遅い・異なる・細かすぎる等々である。

側溝清掃の実施期間は概ね被災直後から2011年年末までであった。

従事したボランティアの延べ人数は概ね8,200人である。

また、手がけた側溝の述べ延長は5,700mである。

(1)防波堤・流末の流失 菖蒲田浜



20110313

(2)排水系統麻痺 多賀城市大代



20110319

(3) 流失を免れた家屋 菖蒲田浜



20110314

(4) 側溝清掃 菖蒲田浜



201105

(5) 側溝清掃 菖蒲田浜



201107

(6) 側溝清掃 側溝蓋挙げ機



201107

写真2-1側溝清掃

2. 海浜清掃

2011 年 6 月、吉田浜前塚の漁業関係者から海岸清掃の要望があった。

浜は防波堤は無く、後背の自然林に瓦礫が深く入り込んでいた。大型コンテナや漁船・タイヤやゴム材の漂着が多かった。

県道と海岸には大きな標高差があり、満足に往来可能な道路は存在しなかった。

壮強な若者をメンバーとする NPO が、半月をかけて道を切り開いた。

5 月に一般ボランティアが浜に入った。

これを初めとして、順次荒れた浜辺に大勢のボランティアが入り、菖蒲田浜海水浴場も美しい姿を取り戻した。

(写真 2-2-1 参照)

2011 年夏は、本来の瓦礫撤去と同時に、海岸清掃と次項の防風保安林作業が動いた。これを可能にしたものは言うまでも無く、全国・全世界から駆けつけてくれたボランティア達と通販等の支援をしてくれた表に出ない膨大な方々の志であった。

歓喜に沸いた 2011 年 9 月の「菖蒲田浜、復興まつり」は、他の被災地の何処よりも早く町に明るさと活気を取り戻した象徴であったといえる。

海岸に漂着した大型コンテナや船舶は、宮城県発注工事により処理された。

センターと発注工事現場代理人は、作業日・作業工程の調整を行い、円滑に各々の作業を進めることができた。

海岸と保安林の工事については、工事が発注される前に所轄担当の方と現地で会う機会をとらえ、七ヶ浜町ボランティアセンターの地域環境整備の考え方と、ボランティアの方々の力強い支援の実態をお話ししてきた。

必ずしも正規の手続きを満たすことなく進めたことに対しても、所轄担当の方々から一切の咎めはなく、黙許し、謝辞まで頂戴したことに感謝し感激した。

海岸清掃の実施期間は、概ね被災直後から 2012 年夏までである。

海浜清掃実施面積は、重複施工を含め優に 10 万 m²を超える。

従事したボランティアの延べ人数は概ね 1 万 8000 人である。

(写真 2-2-2、写真 2-2-3 参照)

菖蒲田浜海水浴場 上201105 下201109



吉田浜前塚 2011年6月



写真2-2-1海浜清掃

(1) 菖蒲田浜清掃は何度も海の荒れる度



201109

(2) 海岸ゴミは松林搬路や斜路から搬出



201207

(3) 菖蒲田浜 釣り士が戻ってきた



201110

(4) サーファーが戻ってきた



201204

(5) 菖蒲田浜 夏祭りの賑わい



201207

(6) 菖蒲田浜 北側から防波堤嵩上げ開始



201311

3. 防風保安林整備

3-1 松林清掃の企画と施工

菖蒲田浜海岸の松林（防風保安林）を清掃することを決意した。延長 700 メートル・幅 70～80 メートル。県道沿いは国有保安林、防波堤沿いは町有保安林である。被災直後、倒木と引き込まれた家屋瓦礫により、林内は通りぬけが不可能であった。

松林南端の県立菖蒲田浜海浜公園は、海の七ヶ浜を象徴する存在であった。

またこの地は主要な 2 水系の流末であったが、前掲写真 2-1 (1) のごとく、防波堤ともども流末も壊滅した。公園跡地は瓦礫の仮置き場と化し、流末・公園の復旧の遅れが懸念された。

試験的に松の枯木を伐採し、人力による搬出を試みたが、運搬距離 50 メートルが人力搬出の限界と思われた。

(写真 2-3-1 参照)

そこで松林と浜の清掃に有効な環境整備計画を写真 2-3-2 (1) のように立案した。

必要な航空写真は七ヶ浜町から提供を受けた。計画の主要部分は、

- ① 松林を縦貫する軽トラ走行可能な運搬路
- ② 松林中央の疎林部に設ける 3,000 m²の瓦礫集積所と県道からの侵入路である。

上記の方策の実施により、松林清掃と海浜清掃はスムーズに進行した。

また、同時期に発注された県港湾の海岸粗大物撤去工事と、営林署発注の松枯木伐採工事とも連絡調整を行いながら、支障なくそれぞれ完工することができた。

(写真 2-3-7、写真 2-3-8 参照)

ただし、後述する準備作業は困難を極めた。

3-2 小公園

松林の伐採・清掃は南端の海浜公園から開始した。

また、海浜公園の一角に小公園を企画し作成した。余りにも殺風景な津波来襲地に、小さなオアシスを作りたかった。

ボランティアの造園・植栽専門家の知恵を借りながら、海岸に漂着した米松材・現地発生材・寄付された肥料などを用いて作っていった。

小公園から 100m 北の林の中に散乱していた水難者の碑を、栃木のボランティアで建設業を営む町長さん達が仮建立して下さった。3 年経って碑は仮のままだが、花・供物が絶えない。

小公園からこの碑までは遊歩道や腰掛けを配置した。碑から小公園までの空間は、次項の造園・植栽と相まって、復興祭や夏祭りでは住民や子供達の、さらに訪れたボランティア達の憩いの空間として機能した。

(写真 2-3-2、写真 2-3-3 参照)

3-3 搬路と集積所の施工

搬路と集積所の施工は困難を極めた。原因は一重に機械力の欠如と資材の貧困である。

ボランティアの手で松林清掃を行うと決断した契機は、地元某企業の重機作業の賛助、あるいは寄付とでも言べき申し出があったことである。

所期の工事を進めるためには、

- ① 家屋瓦礫の粉砕
- ② 集積所・搬路の荒造成を機械力で進めること、が不可欠であった。しかし、ボランティアが重機作業を実施することは、保険等の制約から現在は出来ない。

その地元企業が、会社としての貢献を模索して来所された折に苦衷を伝えたところ、自社の重機と人

員を自前の保険と責任で、1ヶ月間奉仕いただける（独自に動く）旨の申し出を受けた。

センターでは住民やボランティアとの間で事故等が発生しないよう細心の注意を払い、地元企業の方々は重機（掘削系と運搬系）をフルに使用して、4～5人のオペレーターが週替わりで存分の仕事をされた。

（写真 2-3-4（1）～（4）参照）

一方、700mの搬路は長かった。津波の洗掘が激しく、あちこちに木組みが必要になった。現地の砂は単粒の細砂のため、コンクリートクラッシャーランによる覆土が必用だった。軽トラに人力のシャベルで積み込み、下ろし、敷き均して転圧した。

搬路が完成するのを追って別働隊が、林の中の瓦礫を搬路沿いに移動した。

ご婦人や年少者が主体のグループは、拾い上げたガラス片等を土嚢袋に詰めて排出した。

（写真 3-3-4、写真 3-3-5、写真 3-3-6 参照）

3-4 松林瓦礫の搬出・夏祭り・現在

2011年11月・12月、それまでの過酷な準備作業は、日に500人のボランティア清掃作業を十分に支えた。

（写真 3-3-7 参照）

3000 m²の集積所は2度いっぱいになった。

そのつど営林署の発注業者が搬出してくれた。

営林署はその後の枯れ木を伐採備蓄し、次年度以降チップとして松林に戻すとの事であった。

センター施工分についても協力依頼があったので従い、搬路沿いに存置した。

清掃の終了した松林には、12年3月と13年3月、長野県から大勢のボランティアが訪れ慰霊の花を捧げていた。

松林を雑木との混成林にして強化を図ろうとする数人のボランティアは、現在も藩種後の経過を観察している。

2012年夏、松林・小公園・砂浜は憩いの空間を提供することとなり、秋には植樹した町花、はまぎくが咲きそろった。

津波が防風林の松に与えたダメージは深刻であり、伐採時には緑葉が見られて伐採を逃れた松も、相当数がその後枯死した。

しかし、ボランティア活動によって陽光に恵まれた植林や実生の若木は、順調に生育を続けている。

700mの搬路は、その後発注された防波堤改築の為の測量・ボーリングの実施時に重宝されていた。また、集積所の浸入路は、防波堤工事のメイン道路として拡幅補強され活躍中である。

（写真 3-3-8、写真 3-3-9、写真 3-3-10 参照）

防風保安林整備の実施期間は、2011年7月から同年12月までの半年間である。

防風保安林整備実施面積は、概ね5万m²である。

従事したボランティアの延べ人数は、概ね1万2000人である。

(1) 被災直後の県道脇保安林



201107

(2) 被災直後の保安林内



201107

(3) 被災直後 海側の町有保安林



201107

(4) 試験伐採



201107

(5) 試験搬出



201107

(6) 菖蒲田浜海浜公園



201107

写真2-3-1 防風保安林整備

写真2-3-2(1) 菖蒲田浜環境整備計画図

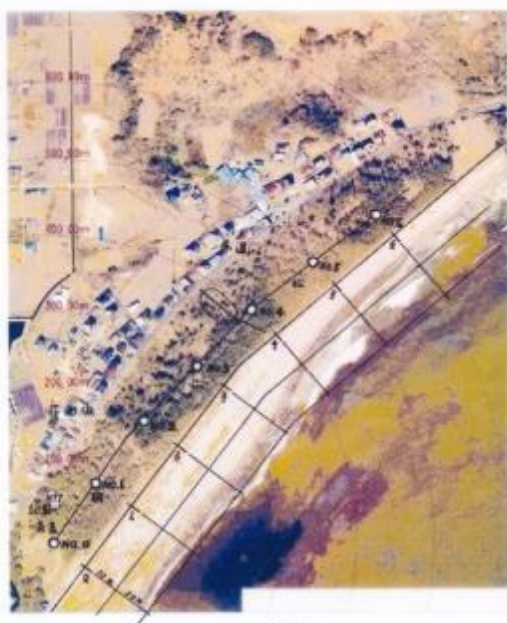


写真2-3-2(2) 小公園除草



201107

写真2-3-2(3) 山砂搬入・施肥



201107

写真2-3-2(4) 不燃粗大瓦礫撤去



201108

写真2-3-2(5) 漂着米松のモニュメント作成



201108

写真2-3-2 防風保安林整備

(1)漂着瓦礫のモニュメント作成



201108

(2)海難者慰霊碑の仮復元



201108

(3)復興祭り 花木植栽



201108

(4)土嚢とシート製の池



201108

(5)復興祭り



201108

(6)小公園完成



201110

写真2-3-3防風保安林整備

(1) 流入家屋の小割り・粉砕



(2) 瓦礫集積所の造成



(3) 県道からの浸入路造成



(4) 木組みに海砂を被せ搬路造成



(5) 枯木と搬路支障木の伐採



(6) 伐採松材の搬出



(7) 発生松材を利用 砂利止め



(8) 発生松材の整形備蓄



写真2-3-4防風保安林整備

写真2-3-5(1)コンクリートクラッシャーラン搬入



201109

写真2-3-5(2)搬路への碎石敷き均し



201110

写真2-3-5(3)搬路碎石の転圧



201110

写真2-3-5(4)搬路木組み 栃木県庁の方々



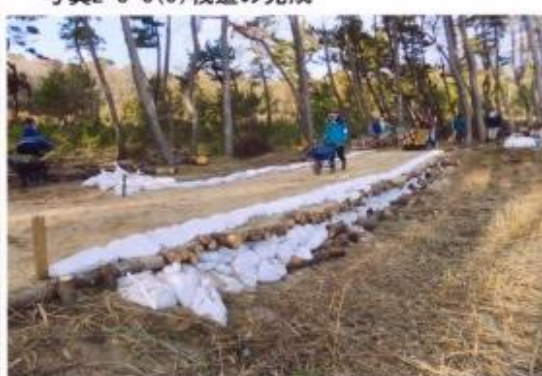
201109

写真2-3-5(5)搬路終点付近 粗朶沈床・木組み



201111

写真2-3-5(6)棧道の完成



201111

写真2-3-5防風保安林整備

写真2-3-6(1)搬路沿いの瓦礫を集積所に運搬



201110

写真2-3-6(2)県道脇家屋瓦礫の搬出



201110

写真2-3-6(3)松林内の瓦礫を搬路沿いに



201110

写真2-3-6(4)鎮魂



201111

写真2-3-6(5)記念写真をリーダーに撮ってもらって



201110

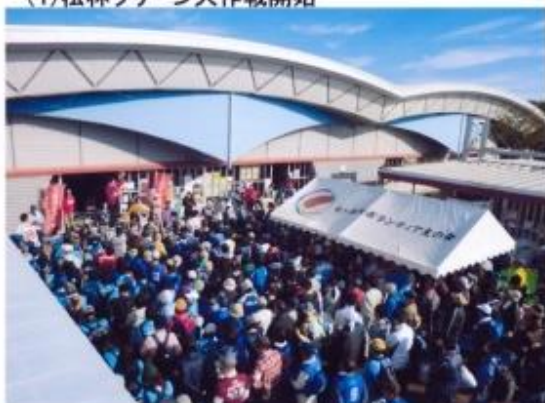
写真2-3-6(6)海に響け 県歌「信濃の国」



201110

写真2-3-6防風保安林整備

(1) 松林クリーン大作戦開始



201111

(2) 日に500人を超えた



201111

(3) 防波堤から松林へ



201111

(4) 総がかりで瓦礫搬出



201111

(5) リヤカー活躍



201111

(6) 軽トラックを待ちきれない



201111

写真2-3-7 防風保安林整備

(1)集積所瓦礫搬出(仙台営林署)



201111

(2)雪の搬路 2011年12月



201112

(3)集積所(3千㎡)は2度満杯



201112

(4)営林署の松材伐採と集積



201201

(5)集積所で1面目の慰霊祭を



201203

(6)信州の山から雑木の種子を



201203

写真2-3-8防風保安林整備

写真2-3-9(1)2012年7月 トライアスロン



201207

写真2-3-9(2)2012年夏祭り 寄贈されたハマギク



201207

写真2-3-9(3)2012年夏祭り



201207

写真2-3-9(4)2012年夏祭り



201207

写真2-3-9(5)2012年夏祭り 森のパネル展示



201207

写真2-3-9(6)2012年10月 町花ハマギク



201210

写真2-3-9防風保安林整備

(1)防波堤嵩上げ丁張り



201211

(2)防波堤工事車両と浸入路



201210

(3)再生の時を待つ菖蒲田浜



201401

写真2-3-10防風保安林整備

4. 造園・植栽

七ヶ浜町は日本全国から、沢山の花の苗や球根、花木を頂戴した。

また、これらを松林の小公園・菖蒲田浜の駐車場や通学路に植栽するに当たり、多くのボランティアの支援を得ることができた。

2011 年 9 月の「菖蒲田浜・復興まつり」や 2012 年 7 月の「ありがとう七ヶ浜・海まつり」の際、小公園とそれに続く海難慰霊碑までの遊歩道での花木植栽は、家族連れの方には特に楽しみ、かつ喜んで頂けた。

実のところ 2011 年の年末に、七ヶ浜町ボランティアセンターは歳が越せるかを懸念した。

当時、家屋瓦礫出し、海浜清掃、防風保安林保全はほぼ完了、しかし、その後の最大の取り組みとなる農地復興の支援要請はいまだ無かった。

行政・農業団体とのタイアップをも視野に入れてはいたが、ボランティアの来訪があつてのセンターであり、存続の危機を迎えるかと思われた。

しかし、造園・植栽のボランティア活動がこの危機を救い、活動の勢いを 2012 年春の農地回復支援要請まで持続させてくれた。

植栽内容は大きく 3 分される。

第一期：2011 年復興祭の頃。サルビア・ペゴニア・ペチュニア・アジサイなど。

第二期：2012 年春の頃。水仙とチューリップ球根 1 万 8000 球の寄贈を受けた。

第三期：2012 年夏祭りの頃。全国から七ヶ浜町の町花「ハマギク」の大量寄贈。

造園・植栽に携わったボランティアは概数 3,500 人である。

(写真 2-4-1、写真 2-4-2 参照)

5. 町営農園復旧

七ヶ浜町営「ほのぼの農園」は、家庭菜園として多くの町民が土に親しみ、恵みに感謝する場となっていた。

多くの水鳥が飛来する阿川沼に隣接し、トンボ池等の自然観察施設が整備されていたことから、子供達には自然に親しみ、学び遊ぶ場でもあった。

来襲した津波は阿川沼の土砂や生物を吹き上げ、農園とその管理棟を破壊し、隣の阿川沼水質浄化施設を壊滅させた。

センターは、被災後失われてしまった憩いの場の再生を、地域環境整備の活動に求めようとし、阿川沼周辺もその大きな核と考えてはいた。

しかし、水質浄化機能を失ったその後の沼には、アオミドロが蔓延して異臭が立ちこめ、魚類や水鳥を見ることはできなかった。

2 年余りの放置の後、2013 年 5 月、ボランティアが管理棟から散乱して畑土に混入した瓦礫の撤去に取り掛かった。水質浄化施設は旧態だったが、降雨による除塩によって環境は好転しつつあった。

この頃のボランティアは、年齢構成と活動目的が以前とは多少異なり、若年層が多く、被災地訪問兼ボランティア体験型が多くなっていた。

七ヶ浜でのボランティア活動全般で多数見られ参加者に好評だった取り組みがある。それは、スタッフやリーダーの多くが津波について語り、時間外に案内し、作業後に参加者が語る機会を設けるというプランの実行である。引率の先生方は特に喜んでおられたように思う。

徳島県つるぎ町は人口 1 万人、吉野川沿いに位置する山村である。何度も活動に来ていただいたが、役場の各方面の専門家で構成する「東北復興支援チーム」から、再度参加申し込みがあった。

彼らの東北支援は 4 度目。1 度目はバスに毛布ミルク哺乳瓶を積んで南三陸町へ。2 度目は特産の半

田ソーメンとカレーを石巻に運び、3,000 食の焼き出し、3 度目はその 1 年前に「ありがとう七ヶ浜・海まつり」に向け、チェーンソーで小公園の草刈機作業。そして今回は管財課長さんを隊長に 9 名が来訪との事であった。土木経験者が 3 人、設計測量可能、なぜか災害時に自前で土を動かせる一人もいた。

5 月末、七ヶ浜町から借用の農園図面により設計し、四国から運んできた器材で丁張りを設置、丁張りにあわせて土が動いた。畑土の瓦礫除去には、2012 年春から大量に取り組んできた水田での手法がすっかり応用できた。

また、つるぎ町の町長さんが来訪して職員を督励され、町長対談が行われた。隊員には防災担当者がおり、七ヶ浜町が急遽開催してくれた防災会議は有難かった。

つるぎ町の方々は 10 日間の目覚しい活動を終え、満足げに帰町された。彼らの思いを受け止め、満たすことが若干でも出来たのであれば幸いである。

その後大勢のボランティアが活動し、仮復旧した畑には、甘藷・大豆・蕎麦・玉葱が植えられ、順次収穫された。

2013 年 10 月、この農園に住民・行政・農業団体・ボランティアが大勢集まり、「七ヶ浜町農地復旧感謝祭」が盛大に執り行われた。

町営農園は概ね 2,000 m²、復旧に携わったボランティアは概数 8,000 人である。

(写真 2-5-1、写真 2-5-2 参照)

6. 報告を終えるに当たって

最後に報告した町営ほのぼの農園には、是非担っていただきたい役割がある。

それは、「被災者の方々が土に親しみ癒され、真の復興に向け踏み出す確かな基盤となること」である。これは多くのボランティアとともに、地域のため住民のためになることは何でもやろうと

考え、活動してきたセンターの切なる願いである。

いちボランティアセンターにとっては、定性的にあるいは他地区との比較で、七ヶ浜は何処より明るく活気がある、と述べるのが精一杯で、そのために一般ボランティアが果たした役割を分析し、特定する能力はない。

また大判振る舞いの復興予算が今後も続いていく中では、ボランティアのかいな（腕）が地域や国にどれだけ役に立ったのかさえも分からない。

しかし、時にきつかった活動の中で、ボランティアが知りたかった、「自分たちの活動は、被災者が立ち上がるために役に立っているのか」、という問いには、何らかの証しを残したいと願う。

家屋瓦礫作業と異なり環境整備の作業では、住民・被災者と接する機会は少ない。松林での作業の休憩時間に、「住民の方は何処に？」、「笑顔もジュースも無いけれど、潮騒と梢を渡る松風がきくと有難うと……」といった会話もあった。

七ヶ浜町ボランティアセンターは、被災者をも含むスタッフが、終始中核となって運営されてきた。従ってこの周辺状況下で、被災された方がどう考えて行動するか、複雑を極めることはよく理解している。震災からほぼ 3 年、仮設から永住の家への移住が見え、生計も安定を取り戻しつつあるこの時期になって、いわば真のスタート位置に着いたということであろう。

農園回復活動は、多くのボランティアがささやかな願いを抱きながら汗した松林や公園の整備事業とは、時間や空間が異なる。だがしかし、この農園の復旧が自分達の汗の延長線上にあり、被災者のスタートを自然な形で後押ししていると感じられるならば、活動への思いは深く満たされる。

押し寄せるマンパワーにおされ、心ならずもボランティアを酷使したかもしれないことの免罪も同時に。

<終わり>

(1)小公園花壇植栽 復興祭 2011年8月



(2)小公園花壇 ハワイのケンさん 2011年9月



(3)小公園花壇 2011年9月



(4)東北の企業から花木の寄贈 2011年12月



(4)植栽植え替えのボランティア



(6)遊歩道の水仙が発芽 2012年3月



写真2-4-1造園・植栽

(1)町営ほのぼの農園 2013年5月



(2)中学生ボランティアが瓦礫除去



(3)つるぎ町4度目来訪 借用図面で設計2013年6月



(4)測量 測量機器は四国から海を越えてきた



(5)丁張りにあわせ整地 瓦礫撤去



(6)ひたすら振るった



写真2-5-1町営農園復旧

(1) ひたすら拾った



(2) 農園が戻った



(3) 大豆



(4) 蕎麦



(5) 収穫



(6) 阿川沼・最終到達地



写真2-5-2町営農園復旧